OUHS
OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES
スポーツ
大体大
第40号
発行責任者
大阪体育大学広報室
室長　大坪康巳
編集長
大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1
電話（072）453－7021
FAX（072）453－8818
協力＝教育後援会・学友会

快挙！下浦、中瀬 関西インカレ4連覇!!

「1回生から狙った」今季は50㍍目指す

陸上競技部

5月の第100回関西学生陸上競技対校選手権大会（大阪市・ヤンマースタジアム長居ほか）で快挙が生まれた。男子砲丸投げの下浦大輝（大学院博士前期課程2年）が15㍍95、女子円盤投げの中瀬綺音（体育4年）が46㍍39で、ともに4連覇を達成した。男子砲丸投げは21年ぶり、女子円盤投げは39年ぶりの快挙だった。

中瀬は入学から負けなしでの4連覇。「1回生で優勝した時から4連覇を狙っていた。シンプルにうれしい」と笑顔を見せた。

試合では、中瀬は少し焦っていた。タイミングが合わず納得のいく動きができない。自己ベストは47㍍90だが、1投目から、41㍍22、ファウル、43㍍74。「やばいな」と思い始めていた。

決勝に残り、4投目からは吹っ切れた。「焦らずしっかり投げれば勝てる自信はある。自分にプレッシャーをかけ、思い切り挑んだ」

4投目はファウルだったが、5投目で46㍍39。1年前に出した自己ベストには及ばないが、「これだけは投げたいという最低ラインはクリアできたのかも」。2位に3㍍以上の大差をつけての4連覇となった。

本格的に円盤投げを始めたのは、東大阪大学敬愛高校に入学してからだ。頑張れば頑張った通りに距離が出ること。満足のいく動きで投げた時の円盤のきれいな放物線。これらに魅力を感じて、競技に没頭した。高校3年の時、全国インターハイで7位に入賞した。「関西で投擲が強いところはここだけ」と考え、大阪体育大学に入学した。

4連覇を1年生から意識したのは、やり投げ世界選手権11位の先輩、武本紗栄（Team SSP）の存在だ。1年生で関西インカレ初優勝を果たすと、2年上の武本から「4連覇を目指さないといけない」とアドバイスされた。翌年、その武本が関西インカレ4連覇を達成。「自分も武本先輩のようになりたいと思った」という。普段は明るくて楽しいが、競技をする時は真剣そのもの。練習一つ一つの意味深さ。武本の競技への向き合い方が勉強になったという。

大体大の投擲は、女子フィールド得点で2位に大差をつけて優勝するなど圧倒的な強さを誇り、中瀬のほかにも男女の砲丸投げ、ハンマー投げで優勝した。中瀬は「周りに強い選手がたくさんいることで、自分の弱さも、自信をもつべき点も見えてくる。卒業生も含めて競い合えることはとても力になるし、仲間が勝ってくれると本当にうれしいし、力が湧く」と話す。

昨年の日本学生対校選手権は46㍍92で3位だった。今季のシーズン目標は50㍍。「50㍍を超えて昨年より高い成績を目指したい」。9月の日本学生に向けて、そう宣言した。

大学3年で開花

下浦は、大学3年から大学院博士前期課程2年にかけての達成。「大学の誇りとなる関西インカレに大学1年から6年も出場できたのは、家族や周囲のおかげ。感謝したい」と6年連続出場を感慨深げに振り返ったうえで、「素直に4連覇を喜びたい」と語った。

1投目の15㍍10など前半は、ファウルを怖がったほか、幾分の緊張で前への体重移動がうまくいかなかった。決勝に進んだ4投目以降に、その点を修正できたのは、冬場の練習の成果という。「6年間、コーチから受けたアドバイスを思い返しながらいい練習を詰めたことが活きた」と話す。

5投目は昨年5月の自己ベストに並ぶ15㍍95。後輩の黒田翔貴（体育4年）に3投目で自分に後11㌢と迫られ、「負けられない」と心にギアが入ったのも好作用した。

中学1年から砲丸投げを始め、奈良・添上高校ではインターハイ9位だった。

関西インカレは、1年時に4位、2年時も表彰台を逃した。2年時は1年生に敗れ、悔しさが募ったのも奮起につながった。

また、3年だった2020年は新型コロナウイルス感染症が拡大して練習時間も大きく制限される中、投げるのか体を鍛えるのか狙いを絞った練習をしたのも良かったという。関西インカレ初優勝。以後、連覇を重ねた。

今季は4月の日本学生個人選手権大会でも15㍍74をマークし、自身初の表彰台（3位）に立った。

大学院博士前期課程ではアダプテッド・スポーツを専攻し、来年の修了後は教育現場での指導を目指す。

9月の日本学生対校選手権大会に向けて、「自己ベストをマークして3位以内に食い込みたい」。集大成となる大会への意気込みを語った。

大体大の顔としてプレーしていきたい

サッカー部男子

サッカー部男子のMF・木戸柊摩（体育学部3年）が、JリーグのJ1・北海道コンサドーレ札幌への、2025シーズンからの新加入が内定した。

木戸は、北海道・北海学園札幌高校卒。北海道コンサドーレ札幌U－18に所属した。大学ではU－19日本代表候補（2022年）、U－20全日本大学選抜（2023年）に選ばれている。

サッカー部男子では、関西学生リーグで7試合に出場し、2ゴールを決めたほか、アシストランキングでは5アシストでチームトップの4位につけている（6月末時点）。

木戸は加入内定時に、「まずは夢であったプロのスタートラインに立てたことを嬉しく思います。今まで自分を支えてくれた家族、仲間、指導者の方々に感謝します。そして、大阪体育大学の顔として責任を持ってプレーしていきます。これからも常に感謝の気持ちを忘れず、謙虚でひたむきに取り組み、皆様に応援してもらえるような人間になります」とコメントしている。

ハンドボール部 女子

関西18季連続V！インカレへ向けて課題も

関西学生ハンドボール春季リーグ

今年、全日本インカレ10連覇がかかるハンドボール部女子。4～5月の関西学生ハンドボール春季リーグは18季連続（コロナ禍による中断をはさむ）42回目の優勝を果たした。

和田薫

主将の藤井愛子（体育4年）は「西日本インカレに向けて、まだディフェンスもオフェンスも課題を解決できていない」と厳しい。春季リーグは、全員がなるべく多く出場する方針のため、連携がうまく取れない部分もあったというが、全勝同士で迎えた関西学院大学戦も31―18と圧倒した。

最優秀選手の藤井、優秀選手の松浦未南、和田薫（いずれも体育4年）。この4年生3人がチームを引っ張る。

高来葵美

藤井愛子

ピボットの藤井はどんなに固いディフェンスでも間をこじあけて点を取りにいき、センターバックの松浦は速いボール回しのほか自分も高く跳びロングシュートを放つ。センターディフェンスの和田は左右の選手に指示しながら全体のディフェンスを統率する。

さらに、ライトバックの石川空（体育3年）は男子選手にも負けないようなロングシュートが特徴で、女子日本代表にも加わり、女子日本代表監督を兼任する楠本繁生監督とともに、8月のパリ五輪アジア予選（広島）での五輪切符獲得を目指す。

松浦未南

チームは楠本監督から「インカレの連覇は今のメンバーが果たしたことじゃない。『10』『9』など考えず、1年という時間をそれぞれの代でどう使うか、どうやってインカレを勝ち上がるのかを自分たちで考えてほしい」と徹底されている。それぞれの代が考え抜いて達成したインカレ優勝。藤井主将を中心に考え抜く日々が続く。

ハンドボール部 男子

積み重ねた偉業！3季連続通算82回目V

関西学生ハンドボール春季リーグ

ハンドボール部男子は4～5月に開催された関西学生春季リーグで9戦全勝し、3季連続82回目の優勝を果たした。

荒瀬廉

今井寛人

泉本繁輝

今季は3月の函館合宿、関東の強豪が集結した山梨合宿を通してチームを仕上げ、リーグ戦に臨んだ。

昨年のディフェンスは、6人が3―2―1で三角形を作る「立体DF」を軸に臨んだ。しかし、今季は188㌢の長身GK、今井寛人（体育4年）が台頭したこともあり、6―0と横に並ぶ「一線DF」にシフトし、安定した戦いぶりに。全勝対決となった関西大学戦は、突き放せる場面で大差を付けられず31―29と競ったが、エースが奮闘した相手に対しオフェンス全体で得点できる層の厚さを活かした。今井が最優秀選手、谷貴文主将（体育4年）、荒瀬廉（体育3年）が優秀選手に選ばれた。

谷貴文

今井は、昨年は矢村裕斗（現ジークスター東京）の陰に隠れたが、今季は積極的に前に出るプレーで守護神に。谷は主将としてチームをまとめる一方でディフェンス力が高く、相手との駆け引きも巧み。荒瀬は点を取る嗅覚に優れ、負けん気の強さ、独特のタイミングのシュートが持ち味だ。

今井、荒瀬はジュニア（U21）世界選手権（ドイツ）にも出場した。

関西インカレは1972年の初優勝を振り出しに、優勝82回と途方もない数字を積み重ねた。下川真良監督は「選手から大学に残って優勝を積み重ねた宍倉保雄前監督の偉業です」と改めて恩師に敬意を表する。

チームにとっての目標は、当然、5年ぶりの全日本インカレ優勝しかない。中央大学など関東のトップとは平均身長で10㌢近い差はあるが、下川監督は「チームワーク、人間力を高めていけば、チャンスは十分ある」。まずは、8月の西日本学生選手権で頂点を取り、勢いをつけて関東勢に挑む。

全日本大学女子硬式野球選手権大会高知大会

硬式野球部 女子

安定の投手力で競り勝ち5位

柏﨑咲和（左）、山本一花

左川楓

筒井愛衣

中村莉菜

硬式野球部女子は5月に開催された第9回全日本大学女子硬式野球選手権大会高知大会に出場。準々決勝で敗れたが、順位決定戦で勝ち、5位となった。

今季のチームは投手力が安定し、少ないチャンスをものにして逃げ切るチームカラーだ。

全日本の1回戦は、大会初参加の至誠館大学（山口）と対戦。一回に山本一花（体育2年）の適時打と筒井愛衣（体育4年）の犠飛で2点を先取して勢いづき、計9安打。投手もエース左川楓（体育4年）、柏﨑咲和（体育2年）が好継投して、7―1で快勝した。

左川は球速が昨季より約3㌔上がり、内角速球、ツーシームと外のスライダーの揺さぶりが持ち味。柏﨑は80㌔台前半のスローカーブと速球で緩急をつけた。

しかし、続く環太平洋大学（岡山）戦は、制球のいい相手投手に的を絞れず、打線は太田栞（体育4年）の1安打だけと沈黙。春先に好調だった打線は、ゴールデンウィークごろから湿りがちだったが、その不安が出たかたちとなり、0―2で敗れた。

順位決定戦の桃山学院教育大学（大阪）戦は、秋の全日本選手権出場に向けたポイントがかかる重要な試合。二回に初スタメンとなった1年生の児玉椛姫（体育）が先制タイムリー、松井望々香（体育3年）がスクイズを決め、柏﨑が完投。最近、連敗し相性が悪かった相手に2―1で勝利した。

8月23日から和歌山県で全日本大学選手権大会が始まる。横井光治監督は「チャンスで一本打てる強さを持ちたい」。日々の打撃練習で、横井監督の大学野球部時代の友人が速い速球を投げ込み、マシンの球速を上げるなど打力の強化に取り組んでいる。

硬式野球部 男子

春季4位も井田力投！ベストナインへ

阪神大学野球春季リーグ

硬式野球部男子は4～5月の阪神大学野球春季リーグでは、7勝7敗、勝ち点2で4位。先発陣が整備できずに苦戦した中、左肩痛の影響で昨年まで登板経験が乏しかった井田寛太（体育4年）が大車輪の力投。5勝（1敗）を挙げ、ベストナインに輝いた。

弓禁祥太郎

齋藤智也

清水正義主将

井田は第1節、大阪電気通信大学戦の2戦目に先発し、8回を5安打1失点に抑えて大学初勝利。決して球威十分ではないが、速球の切れと小さく鋭く曲がるスライダーで勝負し、スライダーを内角、外角に制球よく投げ分けた。続く関西国際大学戦は8回を2失点。大阪産業大学戦は3安打完封し1―0で勝利。優勝した天理大学にも6回3失点で土をつけた。唯一、敗れた関西国際大学戦（3戦目）も延長10回を1失点で、今リーグの防御率は1・15。エース杉本壮志（現日本製鉄広畑）の卒業で先発陣の整備に苦しむチームを救った。

また、抑えの杉戸理斗（体育4年）は左サイドからの制球がよく、明石商業高校時代に甲子園を経験した大舞台慣れも好作用し、10試合で防御率0・93と安定した。

藤本天平

打線は、チーム打率2割2分5厘とつながりを欠いた中で、初の4番に座った弓禁祥太郎（体育3年）が打率3割5分7厘、1本塁打、11打点。振りが力強く、少々詰まっても内野の頭を超えるパワーが魅力だ。また、3番の齋藤智也（体育2年）は内角に強い打撃が、2番の神田蓮温（体育4年）はセーフティーなど器用な打撃が光った。

秋に向けた課題は投手陣の強化と、就職に向けて4年生の神田らが抜ける外野の再整備。中野和彦監督は「投手が試合を作り、少ないチャンスをものにするうちの野球をできるかどうかが勝負」と2019年春以来の優勝を目指す。

関西16連覇

体操競技部男子は、4月に姫路市で行われた第65回関西学生体操選手権大会で団体総合16連覇を達成し、個人総合では1～3位を独占。6月に神戸市で開催された第73回西日本学生体操選手権大会でも、団体総合2位に入った。

近江奎太

田部壮一郎

築山翔馬

藤井滉翼

唐澤一志

関西学生体操選手権大会
西日本学生体操選手権大会

女子

関西学生選手権は、個人総合で築山翔馬（体育2年）、近江奎太（体育4年）、田部壮一郎（体育3年）が1～3位に入り、4位を除く10位までを独占した。種目別も全種目を制したのはもちろん、ゆか、あん馬、つり輪、跳馬は1～3位を占めた。近江があん馬と平行棒、田部がゆかとつり輪、築山が跳馬、上田遥介（体育3年）が鉄棒を制するなど圧勝だった。

鹿屋体育大学など強豪がそろう西日本学生でも、団体総合2位のほか、個人総合で田部、築山が7位、近江は9位に入った。

種目別では、築山がゆか、あん馬、跳馬で1位。肩に不安がある中で、跳馬でより難度の高い技を決めるなど、得意のゆか以外の種目でのレベルアップを強く印象づけた。

田部は足を痛めて万全ではない中で得意のつり輪で2位に入るなど踏ん張った。近江も平行棒で2位に入った。

また、上田が鉄棒で2位。高校時代インターハイで優勝経験もある得意種目で結果を出した。

藤井滉翼（体育4年）も6種目全体で力をつけ、得意のあん馬で2位に入った。

8月には全日本インカレが開催される。昨年は史上最高の5位に入って初の全日本団体選手権出場を決めた。

藤原敏行監督は「築山、田部や各選手が地道に力をつけ、戦力は昨年以上に増している。過去最高だった昨年の5位を更新できるように努力したい」。

部の上げ潮ムードを持続できるかどうか注目したい。

西日本準V

体操競技部

北田絢女

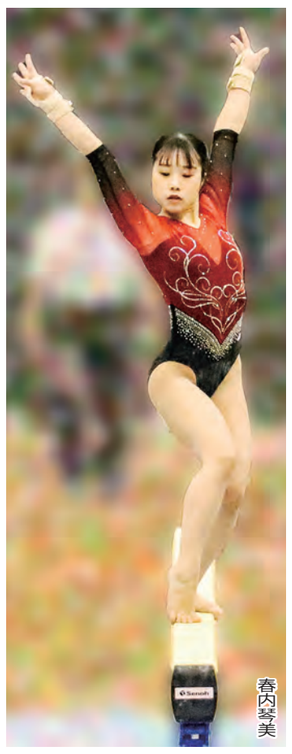
関西学生体操選手権大会
西日本学生体操選手権大会

体操競技部女子は4月の第65回関西学生体操選手権大会で団体総合2位。6月の第73回西日本学生体操選手権大会では昨年から1つ順位を上げ、2007年以来16年ぶりとなる2位となった（2012年は団体優勝）。

女子

連覇を狙った関西学生は、武庫川女子大学とのマッチレースとなったが、ミスが出て団体総合2位。それでも北田絢女（体育3年）が個人総合で2連覇を果たし、種目別も跳馬とゆかで優勝。また、昨年の西日本学生後に腰を痛めていた横江恵（体育2年）が復帰戦で個人総合6位と健闘したのも明るい材料だった。

横江恵


春内琴美

関西学生後、チームの反省点として挙げたのが、跳馬。約1カ月間、跳馬の難度向上に取り組んだ成果が西日本学生で出た。

跳馬でエース北田が種目別1位になったほか、横江が初挑戦の伸身ユルチェンコとび1回ひねりをほぼ完ぺきに決めて3位、大野帆加（体育3年）も新技を決め、団体総合の跳馬は62・165点で全体のトップ。団体総合2位に食い込んだ。個人も北田が個人総合で昨年に引き続き2位、跳馬とゆかで連覇を達成。横江も個人総合で6位に入賞した。田原宏晃監督は「関西インカレ後、チーム状態が万全でなくチーム練習がまともにできない中試合を迎え不安だったが、試合はミスも少なく良い結果で乗り越えることができた」と話す。

今後、8月の全日本インカレに向け、跳馬でのさらなるDスコア（難度）の向上、ゆか、平均台、段違い平行棒は出来栄えなどを評価するEスコアの向上に取り組む。2年前の全日本団体出場権獲得に貢献し、今年はけがで西日本学生などを欠場している北川莉奈（体育3年）が復帰すれば戦力アップとなる。

全日本インカレでのスコア次第では、11月の全日本団体選手権につながる。主将の吉田菜々花（体育4年）は昨秋に腰を痛めて試合から遠ざかるが、精神的支柱としてチームを引っ張る。「吉田主将の復帰の場に」。選手は全日本団体出場を誓っている。

北川莉奈

秋こそ1部へ

バレーボール部

関西大学バレーボール春季リーグ

1部昇格をめざすバレーボール部女子は、4月～5月の関西大学バレーボール春季リーグで女子2部3位となり、2部残留が決定した。秋季リーグで悲願の1部昇格をめざす。

増田結子

徳永優奈

松永あやめ

女子

春季リーグ開幕戦の兵庫大学戦では3―0のストレート勝ちで白星発進。続く桃山学院教育大学戦も3―0で快勝した。

第3戦の芦屋大学戦ではフルセットの熱戦の末、2―3で惜敗。続く大阪大谷大学戦では1セットを落としたものの勝利した。

第5戦の神戸学院大学戦、続く強豪の関西学院大学戦も3―1で勝利した。

続く強豪の大阪国際大学戦、第6戦で勝利した関西学院大学戦とも、1セットを取ったが敗北を喫した。

リーグ戦全勝の大阪国際大学戦との第9戦は、第7戦に続き1―3と連敗。

最終戦の芦屋大学戦では第3戦の雪辱を果たし、3―1で勝利した。

春季リーグの結果は、6勝4敗でリーグ3位となり、入れ替え戦に辛くも届かず、2部残留が決定した。

一方、リーグ戦では、徳永優奈（体育2年）が攻守に活躍。長江晃生監督は「プレーも上手でき、有望な選手。まだまだうまくなるのでは」と評価する。

このほか、増田結子（体育3年）も攻守のキープレーヤー。セッターの楠岡真緒（体育3年）、リベロの松永あやめ（体育2年）ら、下級生も伸び盛りで、今後の期待が高まる。

長江監督は「春季リーグ戦の開幕直前に開催期間が変わり、4年生の教育実習と重なってしまったが、チームとしては下級生の活躍も見られ、2部優勝に向けての準備は確実に進んでいる」と秋季リーグでの悲願の達成に向けて自信をのぞかせた。

楠岡真緒

主力不在も持ち味発揮

関西大学バレーボール春季リーグ
西日本バレーボール大会男子選手権大会

バレーボール部男子は、関西大学バレーボール連盟春季リーグ戦1部を5勝6敗の6位で終えた。個人技術ランキングでは、ブロック決定本数で、小川永遠（体育4年）が2位、榮温輝（体育4年）が3位、アタック決定本数で、山崎泰雅（体育3年）が4位にランクインした。

小川永遠（中央）

男子

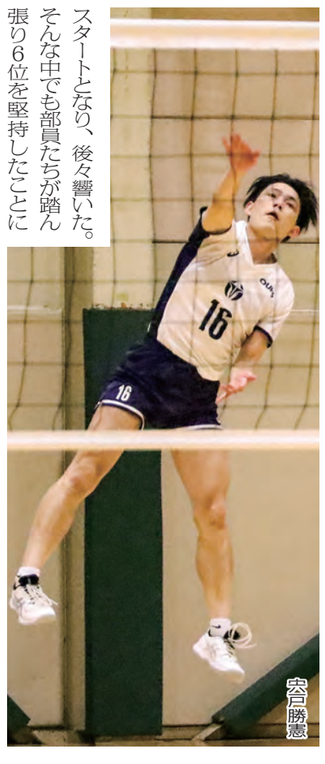
西野祐司監督は「春季リーグ戦序盤は昨季の上位チームと対戦し、主将の途中離脱のアクシデント等の影響もあって勝ち星を得ることができず4連敗スタートとなり、後々響いた。そんな中でも部員たちが踏ん張り6位を堅持したことによって、西日本インカレ（西日本バレーボール大学男子選手権大会）の組み合わせ上のシード権の獲得、天皇杯全日本選手権大阪府ラウンドへの出場権を獲得することができた」と振り返る。西日本インカレでは、グループ戦を勝ち上がり、決勝トーナメント1回戦で高知工科大学に2―1で勝ち、2回戦は名城大学に1―2で敗れた。

西日本インカレでは、教育実習等で4年生がエントリーされていない中、3年生以下のチームの主将を担った樋口貴大（体育3年）を中心に部員たちは試行錯誤しながらも前を向いて戦った。西野監督は「部員たち自身が個々の役割を認識し持てる力を十分に発揮した。結果としては、当初の目標を達成するに至らなかったが、本大会の経験が今後の成長の糧になると確信している」と振り返った。

今後、さらにディフェンス面を強化し、9月に開幕する秋季リーグ戦での優勝を目指す。

榮温輝

得点し喜ぶ選手たち


宍戸勝憲

バスケットボール部 女子

関西学生3連覇！ 課題克服し全日本奪還へ

全関西女子学生バスケットボール選手権大会／西日本学生バスケットボール選手権大会

バスケットボール部女子は4～5月の第44回全関西女子学生バスケットボール選手権大会で3年連続18回目の優勝。村上なおみ監督は「チームのメンバーが大幅に入れ替わり、若いチームとしてチャレンジした大会。課題はあったがかなり粘れたと思う」と振り返る。

アィエビドゥン・グレイス

三次真歩

日高ひかる

中道玲夏（体育4年）、エドポロ・アニィタ（体育4年）、主将の得田歩菜（体育4年）はけがで昨年はほぼプレーしていなかったが、チームは順調に勝ち上がり、決勝は大阪人間科学大学に75―62で快勝。日高ひかる（体育3年）が最優秀選手賞、中道が優秀選手賞、リバウンド王にアィェビドゥン・グレイス（体育1年）、新人賞に三次真歩（体育1年）とグレイスが選ばれた。

6月の女子第72回西日本学生バスケットボール選手権大会は、順調に勝ち上がって準決勝で関西学院大学を73―55で降したが、決勝は課題が残った。

第3ピリオド途中まで競り合い、愛知学泉大学と48―48。しかしタイムアウトの後、相手に一気に引き離され、58―75で敗れた。

シューティングガードの日高はチームが苦しい時に必ず点を取るなど安定感が増し、村上監督は「自分がこのチームを背負って立つという意識がはっきり試合に出るなどさらに成長した」と評価する。

新人も有力で、グレイスは手足が長いうえに反応が素早く、リバウンドの獲得率が高いオールラウンダーだ。シューティングガードの三次も広島皆実高校時代に国際大会を経験し、大きなポテンシャルを秘める。

また、180㌢の大型センター中道の復帰も明るい材料だ。

2012年の全日本インカレ優勝から11年。村上監督は頂点奪還を果たすためには、まだプレーが粗く、愛知学泉大学戦の終盤のように「粘り」の継続ができていないと分析する。「攻撃のバリエーションを増やすなどしてタフに戦い抜くチームに仕上げていきたい」と話している。

バスケットボール部 男子

関西7位、西日本ベスト16 新戦力の成長が収穫

関西学生バスケットボール選手権 西日本バスケットボール選手権大会

バスケットボール部男子は、第50回関西学生バスケットボール選手権大会で3回戦まで勝ち進み、準々決勝で大阪学院大学に敗れ最終結果は7位となった。個人タイトルでは、リヴァース怜央（体育1年）が新人王を受賞した。第73回西日本学生選手権大会では、4回戦で日本経済大学に敗れ最終結果はベスト16となった。

リヴァース怜央

関西学生選手権の大阪学院大学戦では、残り0・2秒でリバウンドを押し込まれてゴールを奪われ、73―75で敗れた。比嘉靖監督は、「準々決勝は非常に惜しい試合だったが、南口皐（体育2年）やリヴァース怜央が新戦力となりこの大会で成長できたのは収穫。4年生では、仲田泰利（体育4年）や下田平翔（体育4年）が中心となりチームを引っ張った」と試合を振り返る。

男子第73回西日本バスケットボール選手権大会では、教育実習で4年生がいない中、佐野悠星（体育3年）や鈴木太晟（体育3年）がリーダーシップを発揮し、チームをまとめた。比嘉監督は、「優勝した日本経済大学や関西王者、東海王者の強豪ひしめくチームが多いブロックだったが、秋のリーグ戦につながる良い経験ができた」と振り返った。

南口皐

下田平翔

仲田泰利

硬式テニス部

北ベスト16、串阪・渡邉ベスト8！ さらなる強化でインカレへ

関西学生春季トーナメント

5～6月に行われた関西学生春季テニストーナメント。硬式テニス部男子は、シングルスで北昇馬（体育3年）がベスト16、ダブルスで串阪達哉（体育3年）・渡邉大樹（体育2年）組がベスト8に進出。それぞれ8月の全日本インカレへの出場を決めた。

北昇馬

男子　北は3年連続のインカレ。パワーあふれるストロークとサーブが持ち味で、気持ちが強く接戦をものにできる選手だ。串阪・渡邉組は初出場。串阪は昨夏ごろから成長し、粘り強いストロークに加えてネットプレーに磨きがかかった。渡邉は相手の力をうまく利用し、ダブルスの細かなテクニックに長けた選手だ。

宮地弘太郎監督は「北のベスト16は彼の力なら最低限の結果。インカレではベスト16以上行ってほしい。串阪・渡邉組は他のベスト8勢とは高校時代の実績も違う中で勝ち上がり、高く評価していい」と話す。

北は「自分に今必要なのは筋力。たんぱく質中心の食事とトレーニングでパワーをつけ、インカレではベスト8を目指す」、串阪と渡邉は「初のインカレでは1試合1試合勝てるように力を尽くしたい」と抱負を語っている。

また、インカレ後は、9月には関西大学対抗リーグが始まる。宮地監督は「うちは全国大会に出ていない選手が多いが、技術的にはいいものがある。日々の練習で、いかに試合を想定し、高い意識を持ち続けるかが重要」とさらなる強化を目指している。

串阪達哉（左）・渡邉大樹

関西学生春季トーナメント

前田、海津、全日本インカレ予選へ

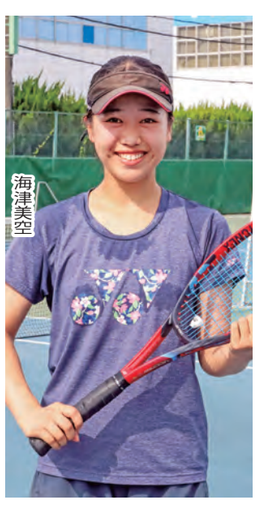
硬式テニス部女子は、5～6月の関西学生春季テニストーナメントのシングルスで、前田明音（体育4年）がベスト16、海津美空（体育3年）がベスト32に進出し、8月の全日本インカレ予選への出場を決めた。そこで勝ち上がれば本戦に進む。

女子　前田はストロークで押す攻撃的なプレーヤーだが、クレバーさも兼ね備える。海津は動きが俊敏で運動能力が高く、1回戦は3時間半の激闘を制した。

関西学生春季トーナメントでは、2人のほか予選のシングルスで主将の福本有杏（体育4年）が本戦に進み、ダブルスではシードの前田・海津組のほか、3組が予選を勝ち上がって本戦に進んだ。

インカレに向けて、前田は「シングルスは初のインカレ。実力以上の力を出したい」、海津は「地元の三重県四日市市での開催なので、恩師に持ち味の積極的なプレーを見せたい」と話す。

9月には関西大学対抗リーグが始まる。岡村修平監督は「春季トーナメントは昨年以上の内容で、チーム力の底上げができた。リーグ戦では長らく遠ざかっている1部復帰を果たしたい」と話している。


海津美空

前田明音

剣道部

全日本、湯川8強、堀32強

全日本女子学生剣道選手権大会
関西女子学生剣道選手権大会

湯川愛梨

堀由美恵

剣道部女子は4月の第53回関西女子学生剣道選手権大会で、堀由美恵（体育4年）がベスト4に進出し、湯川愛梨（体育3年）もベスト8。2人は7月の全日本女子学生剣道選手権の出場権を獲得した。

女子　堀は、昨年は16強に進出し、秋の関西学生優勝大会（団体戦）でも準優勝の原動力となった。集中力は部の中でも極めて高く、決して攻撃的ではないがしなやかさを保ちつつ、相手の技を引き出したところに技を繰り出すスタイル。今大会は5勝して3位に入った。

また、湯川は技のレパートリーが多く、一本に対する執着心が強い選手だ。

繁野萌々香

全日本女子学生選手権では、湯川は初戦から果敢に攻め抜く姿勢を崩さず、ベスト8に進出した。堀はベスト32で、第17回全日本女子学生東西対抗試合の西軍の副将としても出場した。山中監督は「湯川は、特に3回戦の試合は延長戦が続いたが、気持ちを切らさず相手の意表を突く技を決めたところが関西大会と比べて成長できているところ。堀は自分の持ち味を活かして戦い抜きましたが、攻めの部分では課題が残る」と振り返った。

逸見莉子

現在の部の目標は11月の全日本女子学生優勝大会での優勝。山中監督は目標に向けて、練習量は高い水準を維持しているが、一本に対する執着心や貪欲さを今以上に高める必要があるという。選手は自主的なミーティングを重ね、自分自身がより気持ちの強さを持つためにどんな手立てをするべきなのか考えているのだという。山中監督は今季から就任した。本学卒業で、通信制高校で剣道部の顧問をしながら母校で指導する。

9月の関西学生優勝大会に向け、選手は「関西のトップを取って全日本のトップを目指す」と誓っている。山中監督は「母校で監督を務めることに責任の重さを強く感じている。選手たちが目標を達成できるよう指導していきたい」と話している。

菊地、全日本16強

全日本学生剣道選手権大会
関西学生剣道選手権大会

新垣光司

佐藤瑠綺

男子　4月の第71回関西学生剣道選手権大会。昨年は4年生の宮本翔太が優勝したが、今年は佐藤瑠綺（体育4年）と新垣光司（体育3年）のベスト16が最高。村上雷多監督は「現時点では優勝できる力までは正直達していないが、全日本の切符を取るべき選手が切符を逃した」と表情をくもらせた。

7月の全日本インカレ出場権をつかんだのは、佐藤、新垣のほか、花田倭（体育4年）、宮﨑誠也（体育4年）、伊東凜太郎（体育3年）、菊池金太郎（体育2年）の6人。このうち、菊池が全日本インカレで16強に進んだ。一方で、地力のある長谷川碩亮（体育4年）、下村亮（体育4年）、宮﨑翼（体育4年）が出場を逃したのは惜しまれた。

花田倭

菊池金太郎

また、5月末の団体戦・西日本学生大会は初戦で勝ったが、2戦目で敗れた。

部は飛びぬけたエースはいないが、地力のある選手が多い。佐藤は正攻法で、攻めの剣道が持ち味。新垣は多彩な技を使いながら攻め、他の選手にはない技がある。花田は攻めに力があり、前に攻めるとともに引き技も巧み。宮﨑誠は正攻法で遠間からの面を得意とし、伊東は技の切れとスピードがあり、菊池は多彩な技を使って攻める。

村上監督は「エース級がいない分、団体戦で誰が選手として選ばれるかは分からない」と話す。

さらに、1、2年生による6月の大阪学生新人大会では団体で優勝し、個人戦も泉卓磨（体育2年）が優勝した。1、2年生が勢いをつけて上級生に大いに刺激を与えている。

次の部の目標は9月の関西学生優勝大会（団体戦）。村上監督は「課題は攻めの力。技はたくさん出すが、その前のやり取りや相手を誘い出すことができていなかった。そこを徹底して鍛えたい」と巻き返しを目指している。

関西で完敗も、全日本はベスト16進出

関西学生柔道優勝大会

柔道部

西尾碧

中本真奈美

女子　5月の関西学生柔道優勝大会（女子31回）は、この大会を制した明治国際医療大学と1回戦で当たり、0―5で敗れた。松田基子監督は「五分に近い内容で進めた試合もあったが、結果は完敗」と語る。

森口志保（体育3年）は先鋒に抜擢されしぶとい柔道を展開したが、技ありを取られた。本来はセンスがよく器用で技が多彩な次鋒の西村ひかる（体育2年）も一本負けを喫した。

惜しかったのが中堅の中本真奈美（体育2年）。相手は福岡・敬愛高校で同学年の強豪で苦手なタイプだったが、相手が掛けてきたところをうまく合わせて技ありを取る。しかし、指導を2回受けた後、焦って掛けた技が偽装攻撃となり反則負け。松田監督は「勝ちきれなかったのは残念だが、この相手を投げたのは、大会を通して中本だけ。投げたことは自信を持っていい」と話す。副将の西尾碧（体育4年）は技ありを取られ、攻撃力が高い大将の辻野いづみ（体育3年）も敗れた。

辻野いづみ

西村ひかる

雪辱の場となったのが、6月の全日本学生優勝大会だ。初戦で東京女子体育大学を1―1の末、代表者戦で降し、2回戦は富士大学に4―1で快勝。3回戦で優勝した環太平洋大学に敗れたが、ベスト16に進出した。

今年のチームは1年生が6名加入し、唯一の4年生で主将の西尾がうまくまとめ、チームワークはいい。チームは、8月の関西学生体重別選手権大会に向けて、「全日本体重別団体を唯一の4年生の西尾の花道に」と団結している。

この大会でポイントを重ねれば、10月の全日本学生体重別団体優勝大会に返り咲くことができる。

松田監督は「近隣の大学などとの練習でいろんなタイプの選手と妥協せずに戦い、勝ち切る力をつけたい」と話す。

無念の2回戦敗退 巻き返しを誓う

関西学生柔道優勝大会

男子　「一番の目標だった全日本出場を逃したのは非常に残念。しかし、チーム力は昨年よりも着実に付いている」。柔道部男子の生田秀和監督は、2回戦で敗れた5月の第73回関西学生柔道優勝大会をこう振り返る。

水田桜介

久々宮滉大

1回戦は、先鋒に1年生の池田孝輔（体育）を抜擢し、大阪商業大学を7―0と圧倒。初戦の京都産業大学に0―4で敗れた昨年とは違う好スタートを切った。

昨年準優勝の甲南大学と対戦した2回戦は、1―2とリードされて大将戦に。米澤龍之介（体育2年）は、相手に2回の指導が送られ優位に立った。あと指導一つで相手は反則負け、代表者戦に。米澤はそこから勝負に行き、一本負けとなった。生田監督は「一本を取りにいく姿勢は間違っていないが、相手の指導を誘うような技術も勝ち抜くためには必要だ」と語る。

本学は、全日本出場をかけた順位決定戦に回り、京都産業大学と対戦。2―3で敗れたが、昨年、完敗した相手から、久々宮滉大（体育4年）、水田桜介（体育4年）がポイントを取った。主将の久々宮はスタミナ、パワーがあり、受けも強く安定したチームのポイントゲッター。水田は組手が緻密でしっかり攻めることができる試合巧者だ。

米澤龍之介

新田一心

次の目標は、10月の全日本学生体重別優勝大会の出場だ。そのためには、8月の関西学生柔道体重別選手権大会で各階級がポイントを積み上げることが重要。巻き返しを誓い、日々の練習に励んでいる。

サッカー部

4年生不在も健闘の2位
秋に頂点奪還へ

サッカー部女子は、2季連続優勝中の関西学生女子サッカー春季リーグで、5勝1敗1分けとし、2位。石居宜子監督は「インカレで戦えるチームを作るための最初の公式戦。4年生が教育実習で抜ける中では健闘した」と評価した。

梅菜々笑　矢野梨紗

女子　開幕戦でびわこ成蹊スポーツ大学に、赤尾侑里（体育3年）、橋本結菜（体育1年）、桂亜依（体育4年）がゴールし3―0で快勝した。以後、白星を重ね、5勝1分けとして最終節で全勝の明治国際医療大学と対戦し、2―7で敗れた。石居監督は「無難に終わるよりも、守備面での課題がはっきり出て良かった」と話す。

4年生が教育実習のために春の公式戦を欠場することは、ある意味、大阪体育大学の常。その中で1年生を積極的に起用し、橋本や三代淑世（体育）がゴールを決め、北原歩奈、東瑞里、沖百萌花、中垣和佳奈（いずれも体育）らが経験を積んだ。

全員で守り、走り勝って攻めるチームカラー。MF桂は相手をよく見て切り裂くドリブルが得意で、今年3月の第1回大学女子日韓定期戦に出場しゴールを決めた。FWの矢野梨紗（体育4年）、梅菜々笑（体育4年）は2月、関西学連選抜に選ばれた。DFの清悠香（体育2年）は体を張って相手のカウンターを止め、1年からレギュラーのGK津田明日翔（体育4年）はバネと読みでピンチを救う。

9月からの秋季リーグに向けて、石居監督は「秋のリーグ戦は全日本インカレのシードがかかる。春を経験した1年生も含めて戦える選手を増やし、優勝してシード権を取りに行く」。全日本インカレで昨年の8強を大きく上回るためにも、秋季リーグでの頂点奪回は不可欠だ。

津田明日翔

辻原莉音

関西学生女子サッカー春季リーグ

「得点王」古山がチーム牽引

古山兼悟

佐野竜眞

佐藤陽成

高橋怜士

サッカー部男子は関西学生サッカーリーグ前期の6月末時点で5勝3敗1分け、勝ち点16で3位につけている。

男子　初戦の京都産業大学戦で後半に逆転しながら2―3と黒星スタート。しかし、続く関西福祉大学戦で2―1と逆転勝ちし、関西大学戦も2―1とし連勝。以後、大阪経済大学に1―3、桃山学院大学に4―0、立命館大学と1―1、同志社大学に2―1、関西学院大学に1―4とし、約1カ月の中断前で最後の試合の阪南大学戦は5―2と快勝した。

チームをけん引するのは、FWの古山兼悟（体育3年）だ。開幕からの5試合連続ゴールをはじめ、9試合中7試合でゴール。得点ランキングでは2位に5点の大差をつける12得点でトップを独走中。昨年も19得点で得点王に輝き、1年生も4得点。すでに35得点とゴールを量産している。

今季は5月14日の桃山学院大学戦と6月10日の阪南大学戦でハットトリック（3得点）。阪南大学戦では前半36分木戸柊摩（体育3年）のパスから同点ゴールを決め、後半21分も木戸のアシストから3点目、後半41分は豪快なヘディングシュートを決めた。

島根・立正大淞南高校2年の時、本学OBの林大地（独・ニュルンベルク）のプレーを見て憧れ、本学に入学。「林選手のように泥臭くボールを追い、相手に負けないプレーをしたい」と話す。

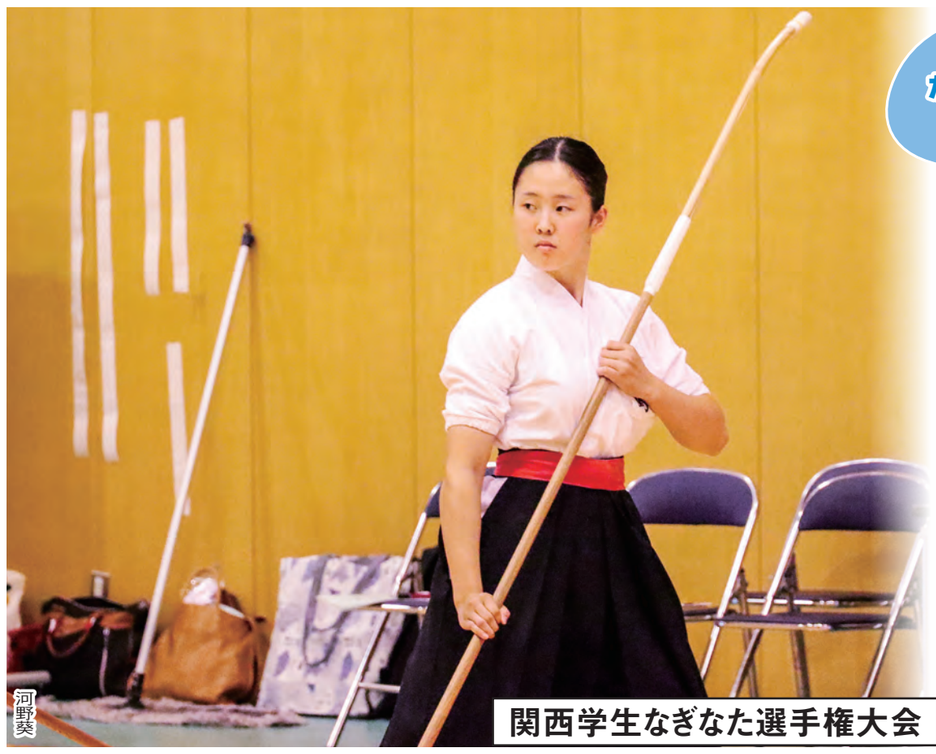
また、佐藤陽成（体育2年）は4アシスト。昨年新人賞を獲得した佐野竜眞（体育2年）も3ゴールを挙げている。

リーグ戦は7月後半に前期2試合が行われ、後期は8～11月に開催される。

関西学生サッカーリーグ

なぎなた部

1年生主体のチームが健闘！
演技、団体共に好成績


河野葵

関西学生なぎなた選手権大会

なぎなた部は6月の第42回関西学生なぎなた選手権大会で、演技競技（有段の部）を2年ぶりに制し、団体の部も3位入賞。エース阿部真優（体育4年）を教育実習で欠く中での好成績に、天川彰子監督は「1年生主体のチームがよく健闘した」と評価した。

昨年は部員3人中経験者が2人で、練習相手にも苦労したが、今年は1年生5人が加入。試合を想定した練習もできるようになり、チームは活気づいた。

試合では、河野葵（体育3年）がチームを引っ張った。演技競技は、河野と川口知咲季（体育1年）のチームが決勝で強豪の神戸松蔭女子学院大学チームを破った。川口は高校時代、国体にも出場し、天川監督は「初めてのペアだったが、経験がプラスになっていた」と話す。

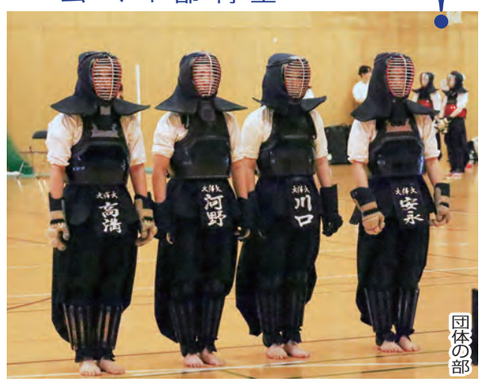
川口知咲季

枡本新

5人制の団体の部は、けがもあって4人で臨み、大将戦が不戦敗になる中で4勝した。

また、男子の枡本新（体育1年）は個人試合で2勝。準決勝、3位決定戦は延長の末判定で敗れたが、高校時代に全国大会上位の経験もあり、攻めの気持ちが強く一本を取る技術を持つ。男子の入部は初心者は一度あるが、経験者は初めてという。

8月の全日本インカレはエース阿部も加わる。天川監督は「5人そろう団体は入賞を目指す。昨年、決勝で敗れた演技は優勝奪還が目標。阿部は、個人試合で優勝を目指してほしい」。新戦力の加入で部は意気が上がっている。



団体の部

バドミントン部

男子が35年ぶりの好成績！
女子は粘りの2部4位

バドミントン部は、男子が5月の関西学生春季リーグ1部で5位。1988年の春季リーグ以来35年ぶりとなる好成績を収めた。

関西学生バドミントン春季リーグ

1次リーグは、強豪の龍谷大学、立命館大学に初戦、2戦目で敗れたが、3戦目の天理大学戦で奮起した。

1試合目のシングルスでエース名田慎二郎（体育4年）が2―0で快勝。2試合目、3試合目で連敗し、1―2と逆転された後に粘った。4試合目のダブルスで名田・田中晴人（教育4年）組が1セット目を失ったが、その後2セットを連取して逆転勝利で2―2。最終試合のシングルスで大西成（体育2年）が1セット目を失った後逆転して、3―2で勝利した。

ハードヒッターの名田、長身からの強打が得意な田中、ラリーに強い大西。選手それぞれが持ち味を出して激闘を制した。

女子は2部で4位。昨年度が4年生中心だったため、一新されたオーダーとなったが、尾原美咲（体育1年）、あかり（体育1年）姉妹、石田麗梨（体育3年）らが1次リーグで2勝1敗と粘った。

10月の全日本インカレに向けて、有吉晃平監督は「男子は昨年、団体で初戦敗退。今年は勝つことに照準を合わせたい。女子は出場を狙う」。インカレの予選を兼ねる8～9月の西日本学生選手権に向け、練習を重ねている。

男女合わせて10種目で表彰台！

今後の成長にも期待

水上競技部

第11回関西学生チャンピオンシップ水泳競技大会が、6月17日(土)、18日(日)の2日間、大阪市立大阪プールで開催され、女子4×200㍍フリーリレーで優勝したほか、2位7種目、3位2種目と、水上競技部が男女合わせて10種目で表彰台に立った。

男子4×100㍍メドレーリレー3位

4×100㍍フリーリレー準優勝＝男子、女子

4×200㍍フリーリレー優勝＝女子、準優勝＝男子

女子4×100㍍メドレーリレー準優勝

関西学生チャンピオンシップ水泳競技大会

女子では、枡井萌（体育3年）が、200㍍個人メドレーで2分20秒95、400㍍個人メドレーでは4分55秒61でそれぞれ2位。続く、4×200㍍フリーリレーでも優勝に貢献した。川島康弘部長は「まだまだ記録が伸びる選手。今後の大会でも良い結果が残せるはず」と評価する。

新井はる佳

枡井萌

この4×200㍍フリーリレーでは、第3泳者の枡井のほか、青山美咲（体育4年）、山村莉子（体育3年）、石田十季子（体育4年）の各泳者が終始リードし、8分32秒90で快勝した。川島部長は「青山がポイントゲッター。試合で力を発揮する選手なので、今後も鍵になる」と期待する。

女子200㍍バタフライでは、新井はる佳（体育4年）が、2分16秒44で2位。4×100㍍フリーリレー、4×100㍍メドレーリレーにも出場し、準優勝につなげた。

男子は、4×100㍍フリーリレー、4×200㍍フリーリレーで2位。木倉颯太（体育3年）、友田和志（体育3年）、大山仁大（体育3年）らがリレーのチームを引っ張り、選手らの総合力を見せた。

個人では、100㍍背泳ぎで、辻本瑞樹（体育3年）が57秒27で3位。続く、4×100㍍メドレーリレーでの3位にも貢献した。

大会は、関西学生選手権、全日本インカレと、熾烈な戦いが続く。川島部長は、リレーでも活躍した井上輝星（体育1年）、関悠弥（体育1年）らを引き合いに出しながら、「1年生の男子選手も伸びてきていて、今後が楽しみ」と話した。

【男子】
▽100㍍背泳ぎ　③辻本瑞樹（体育3年）57秒27
▽4×100㍍フリーリレー　②大体大3分27秒95＝立山拓路（体育4年）、大山仁大（体育3年）、北村祥瑛（体育4年）、吉水尚樹（体育4年）
▽4×200㍍フリーリレー）　②大体大7分41秒72＝井上輝星（体育1年）、木倉颯太（体育3年）、中川瑛介（体育4年）、友田和志（体育3年）
▽4×100㍍メドレーリレー　③大体大3分48秒57＝辻本、関悠弥（体育1年）、友田、大山

【女子】
▽200㍍個人メドレー　②枡井萌（体育3年）2分20秒95
▽400㍍個人メドレー　②枡井4分55秒61
▽200㍍バタフライ　②新井はる佳（体育4年）2分16秒44
▽4×100㍍フリーリレー）　②大体大3分55秒92＝青山美咲（体育4年）、山村莉子（体育3年）、新井、石田十季子（体育4年）
▽4×200㍍フリーリレー）　①大体大8分32秒90＝青山、山村、枡井、石田
▽4×100㍍メドレーリレー　②大体大4分20秒97＝八ツ本実柚（体育4年）、青山、新井、山村

水上競技部

宇津木、世界パラ出場権獲得

水上競技部の宇津木美都（教育学部3年）が3月に静岡県で行われた2023日本パラ水泳春季チャレンジレース兼2023年度日本代表選手選考会の100㍍平泳ぎ（SB8クラス）で1分27秒60をマークして世界パラ水泳選手権（7月31日～8月6日、英国マンチェスター）の標準記録を突破し、出場権を獲得した。東京パラリンピック100㍍平泳ぎで6位に入賞した際の記録を約1秒縮める好タイム。

また、5月にはC・i・t・iパラ水泳ワールドシリーズフランス大会の100㍍平泳ぎで1分28秒71をマーク。個人種目では自身初のメダルとなる銀メダルを獲得した。

ラグビー部

NZ学生代表が本学で合宿

「オールブラックス」でよく知られるラグビー・ニュージーランドの学生代表が大阪体育大学で合宿した。

一行は選手25人、スタッフ5人。5月22日に来日し、25日まで3泊4日、本学に滞在。ラグビー場で練習し、その後、東京に向かい、東京・秩父宮ラグビー場でU20日本代表と対戦した。

本学ラグビー部は、元監督の坂田好弘名誉教授が選手時代にニュージーランド遠征に参加し、その後も日本とニュージーランドの橋渡しを務めていたことなどからニュージーランドと縁が深く、これまでも同国の学生代表をお迎えした。

選手らは約160人が宿泊できるセミナーハウスに泊まり、食事も学生食堂で取った。

マネジャーのサウル・ブリーデンさんは「これまでも学生が温かく迎えてくれるので、大阪体育大学を合宿地に選びました。きのうも食堂で学生が話しかけてきて一緒に写真を撮りました」と話していた。主将のニック・グロゲンさんはラグビー場を「これまでも2回、選手として大阪体育大学で合宿しましたが、スプリンクラーがついている人工芝はニュージーランドにはなく、素晴らしい」と評価した。本学のラグビー場は2003年、国際ラグビーボード（現ワールドラグビー）から人工芝が世界で初めて公式認定され、完成した。

最終戦で快勝！

選手層整え悲願のA復帰へ

マウ・シオネ
松本雛大
懸命のディフェンス

関西大学ラグビー春季トーナメント大会

ラグビー部は5～6月の関西大学春季トーナメントで1勝2敗。最終戦の龍谷大学戦で快勝し、11位だった。

摂南大学に12―55、朝日大学に35―43で敗れて迎えた最終戦。前半は龍谷大学に7―14と先行されたが、後半、マウ・シオネ（体育3年）らを投入すると流れは一転。後半だけで5トライを重ね、36―14で快勝。劣勢の前半にスクラムで圧力をかけ続けたことが相手にとってボディーブローになり、中井俊行監督は「前半はフッカーに吉田敢太（体育4年）を起用してスクラムで圧力をかけ、後半、シオネで推進力をつけた」と振り返った。

和田哲元ヘッドコーチ

今季から、元近鉄ライナーズのSHで、本学を卒業した2007年のW杯に出場した和田（旧姓・金）哲元氏がヘッドコーチに就任した。「セットプレーでマイボールを確実に獲得し、ボールを動かして相手を崩すラグビー」を目指す。龍谷大学戦ではボールを動かす点はまだ未成熟の部分もあったが、FWで圧力をかけセットプレーを制することはできた。

チームは今季からフランカーの原透和（体育4年）、SOの生駒創大郎（体育4年）が共同キャプテン。原のリーダーシップは誰もが認め、生駒はチーム全体を見渡し、戦術面のかじを取る。

チームの目標は、秋の関西大学Bリーグ制覇、入替戦での5年ぶりAリーグ復帰だ。中井監督は「和田ヘッドコーチの熱さが、選手にも浸透しつつある。選手が入れ替わってもセットプレーで圧力をかけられるような厚い選手層を整備したい」と秋に向けて話している。

硬式野球部女子

白石、侍ジャパン女子アジア3連覇に貢献

5月21日から6月1日にかけて香港で開催された「第3回BFA女子野球アジアカップ」で3連覇した侍ジャパン女子代表。大学の所属選手として唯一代表に選出された硬式野球部女子の白石美優（体育3年）も勝利に貢献した。

白石は京都・福知山成美高校出身。プロチームの京都フローラ、愛知ディオーネで計3年プレーし、2021年に本学に入学。その年の9月の全日本インカレ初優勝に貢献した。硬式野球部女子ではセンターを守る。

本学からの侍ジャパン女子代表選出は、2018年の大野七海（現エイジェック）以来5年ぶり。

白石は「日本代表としてプレーするのは初めてだったが、緊張しつつも自分の持ち味を出せたと思う。練習に試合にと、濃い時間を過ごせた」とアジアカップを振り返った。

世界ランキング1位の日本代表は、5月26日に始まったファイナルラウンドからの出場。

白石は開幕戦の韓国戦に途中出場。続くフィリピン戦ではスタメンに選ばれたものの、「緊張をしていたのか、体がこわばっていた」と、2試合とも調子が上がらなかった。

この時、白石は体調不良に見舞われていた。直前の春のインカレ出場から休みなく日本代表の合宿に参加。ファイナルラウンドの開幕に突入し、疲れがピークに達していた。白石は熱が出て2日間寝込んだ。

第3戦のインドネシア戦を欠場。翌日の休養日を経て、30日からのスーパーラウンドを迎えた。

台湾戦に代打で出場した白石は、思い切りよく初球を振り抜き、ダメ押しの2点タイムリー3塁打で12―1の5回コールド勝ちに貢献した。

続く香港戦では、3番に入った白石の2塁打で先制。このあとも中前打、盗塁、犠牲フライと活躍し、チームは15―0の4回コールド勝ちを収めた。

白石は「先制点を取って勢いをつけるのが日本の攻撃スタイル。しっかりと休んで力が抜けたのか、そのスタイルに乗れたと思う」と分析する。

決勝の台湾戦には出場の機会がなかったが、チームは8―3で勝ち、6戦全勝で3連覇した。

9月には広島県三次市で開催される「第9回WBSC女子野球ワールドカップ」のグループステージが控える。大会7連覇をめざす日本代表の戦いに向け、白石は「他国のプレースタイルを学びつつ、しっかりと日本の野球を届けたい」と意気込む。

将来の夢は指導者。白石は「侍ジャパンや硬式野球部での経験を伝え、女子野球を広めていきたい」と抱負を語った。

陸上競技部

陣進躍進 短距離

関西学生陸上競技対校選手権大会／西日本学生陸上競技対校選手権大会

大西蒼玄、萩尾脩人、岩元楓磨、春名友貴（右から、西日本学生男子4×100mリレー）

竹谷陸

森下海

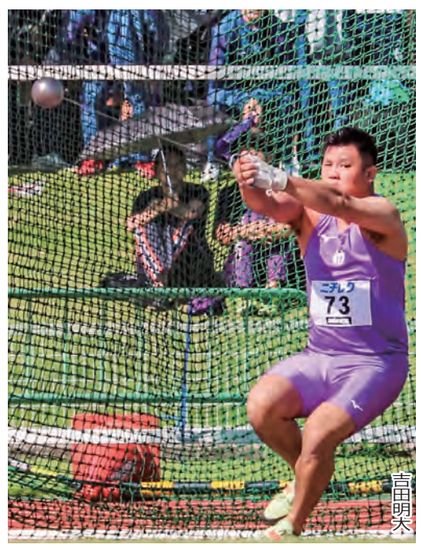
和田真琉

陸上競技部は西日本学生陸上競技対校選手権大会の男子4×100㍍リレーで39秒68をマークし、16年ぶりの優勝を果たした。200㍍と110㍍障害でも、ともにリレーの優勝メンバーの萩尾脩人（体育3年）が21秒42、岩元楓磨（体育4年）が13秒99で優勝。男子4×100㍍リレーは関西学生陸上競技対校選手権大会でも39秒40で2位。男子短距離陣の躍進が際立った。

また、関西学生は、男子は砲丸投げの下浦大輝（大学院博士前期課程2年）、ハンマー投げの吉田明大（大学院博士前期課程2年）、女子は砲丸投げの山本佳奈（体育4年）、ハンマー投げの竹谷陸（体育4年）、円盤投げの中瀬綺音（体育4年）の投擲5種目で優勝し、学校対抗のフィールド得点は男子が49点で2位、女子は55点で1位となった。

原華澄

山本佳奈



吉田明大

黒田翔貴

萩尾脩人

◆第100回関西学生陸上競技対校選手権大会（5月24～27日、大阪市・長居）

【男子】▽100㍍③萩尾脩人10秒49⑥大西蒼玄10秒58▽1500㍍⑦吉山誠4分0秒51▽110㍍障害⑤粟野聖瑳13秒99⑦岩元楓磨14秒09▽4×100㍍リレー②大阪体育大学39秒40（大西蒼玄、萩尾脩人、佐々木良徳、春名友貴）▽走り高跳び⑤大川海翔2㍍05▽棒高跳び⑧山本湧斗4㍍80▽砲丸投げ①下浦大輝15㍍95②黒田翔貴15㍍39▽ハンマー投げ①吉田明大60㍍92②森下海57㍍76⑤湯浅可弦54㍍90▽やり投げ④鈴木陸人64㍍33⑤土永雅也63㍍98⑧上村壮吾62㍍37

【女子】▽800㍍③原華澄2分9秒09▽走り高跳び④和田真琉1㍍73▽走り幅跳び⑥浅野利佳5㍍61▽砲丸投げ①山本佳奈13㍍91②武田光里13㍍65④岩本真波13㍍50▽円盤投げ①中瀬綺音46㍍39▽ハンマー投げ①竹谷陸58㍍32⑤川島空54㍍44⑧五十川利心51㍍72▽やり投げ⑤川合小想47㍍43⑦野間名津巳45㍍51

【対校得点】▽男子1部総合得点⑥73点▽男子1部トラック得点⑧24点▽男子1部フィールド得点②49点▽女子総合得点④61点▽女子フィールド得点①55点

◆第76回西日本学生陸上競技対校選手権大会（6月16～18日、岐阜市）

【男子】▽100㍍⑦大西蒼玄10秒63▽200㍍①萩尾脩人21秒42▽1万㍍⑥中辻隼人31分48秒91▽110㍍障害①岩元楓磨13秒99⑦粟野聖瑳19秒54▽4×100㍍リレー①大阪体育大学39秒68（大西蒼玄、萩尾脩人、岩元楓磨、春名友貴）▽砲丸投げ④下浦大輝15㍍24⑤黒田翔貴14㍍70▽ハンマー投げ③吉田明大63㍍28▽やり投げ⑤鈴木陸人67㍍01

【女子】▽800㍍②原華澄2分7秒18▽走り高跳び②和田真琉1㍍70⑤森岡未優1㍍67▽砲丸投げ⑥中原鈴13㍍68▽円盤投げ③中瀬綺音44㍍25▽ハンマー投げ②竹谷陸56㍍21▽やり投げ⑦川合小想48㍍69

【対校得点】▽男子総合得点④50点▽トラック得点②31点▽フィールド得点⑤19点▽女子総合得点⑦35点▽フィールド得点③28点

◆日本学生陸上競技個人選手権大会（4月21～23日、神奈川県平塚市）

【男子】▽砲丸投げ③下浦大輝15㍍74▽ハンマー投げ⑧吉田明大62㍍57

【女子】▽走り高跳び⑤和田真琉1㍍70▽砲丸投げ⑥岩本真波14㍍41▽円盤投げ⑤中瀬綺音45㍍25▽ハンマー投げ⑤竹谷陸55㍍13

◆U20日本陸上競技大会（6月1～4日、大阪市・長居）

【女子】▽砲丸投げ③武田光里13㍍82④中原鈴13㍍69